

大学出版

5号
'88春



大学出版部協会
Association
of
Japanese University
Presses

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

慶應通信
Keio Tsushin Co., Ltd.

産業能率大学出版部
Sanno Institute of Business Administration

玉川大学出版部
Tamagawa University Press

中央大学出版部
Chuo University Press

東海大学出版会
Tokai University Press

東京大学出版会
University of Tokyo Press

東京電機大学出版局
Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会
Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会
Science University of Tokyo Press

法政大学出版局
Hosei University Press

明星大学出版部
Meisei University Press

早稲田大学出版部
Waseda University Press

名古屋大学出版会
The University of Nagoya Press

関西大学出版部
Kansai University Press

九州大学出版会
Kyusyu University Press



大学出版
5号

Spring · 1988

大学出版部協会の歩み

昭和38年(一九六三)6月11日 大学出版部協会設立

総会、東京大学出版会館にて。玉川大学出版

部、中央大学出版部、東海大学出版会、東京

大学出版会、東京電機大学出版局、東京農業

大学出版会、法政大学出版局、日本学術振興

会、日本図書文化協会(東京教育大学、早稲

田大学出版部、以上十校代表者により大学出

版部協会設立総会を行なう。大学出版部協会

初代幹事長、箕輪成男。

昭和46年(一九七二)11月 関西大学出版部協会加入。

昭和47年(一九七二)9月 北海道大学図書刊行会、

協会加入。

同年11月 アジア太平洋地域大学出版部会議

《国際図書年》を記念して(第一回)東京開催、

主催大学出版部協会。

昭和51年(一九七六)5月 国際学術出版会議(京都

大会)および国際学術出版連合第二回総会を

国立京都国際会議場にて開催。

同年9月 新幹事長に中平千三郎(東京大学出

版会)選出。九州大学出版会、協会加入。

同年11月 玉川大学出版部・東海大学出版会、

国際学術出版連合に加入。

昭和52年(一九七七)12月 東京電機大学出版局、協

会再加入。

昭和53年(一九七八)2月 協会はじめて「大学出版

部協会総合図書目録」一九七八年度版(合本)

を刊行し、共同発送完了。以後年一回定期。

同年5月 東京大学出版会にて、協会設立十五

周年・回顧と展望」座談会を行なう。
同年10月 大学出版部協会創立十五周年記念

「大学出版図書展示即売会」を紀伊国屋書店P

Rルームにて開催。

同年12月 明星大学出版部、協会加入。

昭和54年(一九七九)8月 産業能率大学出版部、協

会加入。

昭和55年(一九八〇)7月 日本生命財団第一回出版

助成の贈呈式と講演会。大阪・日本生命財団

にて行なわれた。12月 慶應通信、協会加入。

昭和56年(一九八一)8月 韓国大学出版部協会訪日

団の歓迎レセプション(日本出版クラブ)。

同年9月 中国にて「日本大学出版物展覧会」

を中国図書進出口総会社の主催、大学出版部

協会の協賛により開催。

昭和57年(一九八二)9月 「日米大学出版局刊行物

展」が、丸善主催、日米両国の大学出版部協

会の協賛により丸善本店で開催。名古屋大学

出版会、協会加入。

昭和58年(一九八三)5月 大学出版部協会創立二〇

周年記念講演会を紀伊国屋ホールにて開催。

昭和60年(一九八五)4月 新幹事長に石井和夫(東

京大学出版会)選出。東京理科大学出版会、

東京農業大学出版会協会加入。

同年8月 中国大学出版部代表团、来日。

昭和61年(一九八六)5月 「大学出版」'86春創刊。

同年9月 北京国際図書展へ大学出版部協会訪

中代表团参加。

昭和62年(一九八七)9月 北京・国際外国語教育図

書展示会へ大学出版部協会訪中代表团参加。

ジャーナリズムからみた
学術図書出版

増永俊一

1

「学術図書」と新聞の読書欄

奥 武則

3

読書欄の編集事情

藤野雅之

5

アイデンティティ

箕輪成男

7

大学出版部協会設立の頃

三井数美

8

創立二十五周年によせて

田口迪太郎

9

新しい大学出版部の参加を

中平千三郎

10

大学出版部ニュース

12

新刊案内 '87・10) '88・3

16

第9回(昭和62年度)

24

日本生命財団刊行助成図書一覧

第9回 (昭和62年度)

日本生命財団刊行助成図書

刊行期間
昭和63年4月
昭和64年3月

●日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に刊行助成を行っている(既刊107点)

生体リズムの研究

本間研一(北海道大学医学部助教授) 代表

北海道大学図書刊行会

近代日本高等教育研究

天野郁夫(東京大学教育学部教授) 著

玉川大学出版部

海洋生物の石灰化と系統進化

大森昌衛(麻布大学教養部教授) ほか編

東海大学出版会

高山寺善本図録

葉上照澄(高山寺山主・比叡山長膺) 監修

東京大学出版会

日本森林行政史の研究

—環境保全の源流—

西尾隆(国際基督教大学教養学部助教授) 著

東京大学出版会

明治期における脚気の歴史

山下政三(東京大学医学部第一内科医局員) 著

東京大学出版会

近世における日本の自然観

斎藤正二(東京電機大学理工学部教授) 著

東京電機大学出版局

ヤマト・琉球民俗の比較研究

下野敏見(鹿児島大学法文学部教授) 著

法政大学出版局

日本海島文化の研究

—民俗風土論的考察—

北見俊夫(筑波大学歴史・人類学系教授) 著

法政大学出版局

鑑別を主体とした細胞診断学

—がんの早期発見のために—

田嶋基男(藤田学園保健衛生大学医学部教授) ほか編

名古屋大学出版会

西日本民俗文化考説

市場直次郎(元九州女子大学教授) 著

九州大学出版会

沖繩の集落景観

坂本磐雄(九州産業大学工学部助教授) 著

九州大学出版会

日本の大学キャンパス成立史

宮本雅明(九州芸術工科大学環境設計学科助教授) 著

九州大学出版会

■九州大学出版会

政治学原理序説―全体的認識へむけて― 徳本 正彦 三〇〇〇円
初等力学演習一五〇題 甲木 伸一 一四〇〇円

システム思考の源流と発展 北川敏男・伊藤重行編 二六〇〇円
経済・経営のためのプログラミングへ経済工学シリーズ

クルマ社会と水害―長崎豪雨災害は訴える― 時永 祥三 二四〇〇円
高橋和雄・高橋裕 一七〇〇円

変化と成長の統計学

H・ゴールドスタイン／小嶋一敏訳 三六〇〇円
憲法制定権の法理―「違憲の憲法」との関連で―

〈北九州大学法政叢書7〉 大隈 義和 三八〇〇円
豊崎郷給人奉公帳〈対馬藩郷土制度史料〉 中村正夫・梅野初平編 五〇〇〇円

IMAGERY AND HUMAN MOTOR ACTION

成瀬悟策 一〇〇〇〇円
ドイツ農業経営論―農法転換と地力維持― 川波 剛毅 四二〇〇円

蝶の学名―その語源と解説―〔第2版〕 平嶋 義宏 三四〇〇円
近代私法学の形成と現代法理論 原島重義編 五五〇〇円

坪内逍遙研究―附・文学論初出資料― 石田 忠彦 八五〇〇円
舞踊における美への視点 金城 光子 五〇〇〇円

西欧中世における都市と農村関係の研究 森本芳樹編著 五八〇〇円

宗教と社会と文化―宗教的文化統合の研究― 野村暢清 一五〇〇〇円

原口竹次郎の生涯—南方調査の先駆—(早稲田人物叢書1)

後藤 乾一 二三〇〇円

ライフコースの社会学 J・クローセン/佐藤ほか訳 二五〇〇円

新版 経営管理の思想家たち 車戸 實編 二六〇〇円

奈良絵本絵巻集第3巻 うつほ物語 中野幸一編 二二〇〇〇円

アジア文化第12号 アジア文化総合研究所編 一六〇〇〇円

日本建築画像体系(ビデオ) 全9巻

早稲田大学情報科学研究センター制作 各三五〇〇〇円

マルカタ南Ⅲ—魚の丘周辺における埋葬と人骨—

古代エジプト調査委員会編 八〇〇〇円

西突厥史の研究 内藤みどり 九五〇〇円

奈良絵本絵巻集第4巻 伊勢物語・富士の人穴 中野幸一編 一二〇〇〇円

エリザベス朝喜劇10選第2巻 アピントンの焼きもち女房たち 一四〇〇円

H・ポーター/大井邦雄訳 一四〇〇円

早稲田大学歌集 伊藤・奥島・林編 二〇〇円

江戸・東京語18話(早稲田選書8) 杉本つとむ 一七〇〇円

奈良絵本絵巻集第5巻 一本菊・よろひがへ 中野幸一編 一二〇〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書二〇 宗祇連歌集

早稲田大学蔵資料影印叢書刊行会編 一五〇〇〇円

日本戦後教育史の諸問題 尾形 利雄 三五〇〇円

Coleridge's Tragic Struggle between Xanadu and Abyssinia Masumi Kaneda 六〇〇〇円

■名古屋大学出版会

道徳の社会学 A・バイエ/久保田勉訳 二五〇〇円

プラトンと法律—ギリシア法思想への案内—松坂佐一 三六〇〇円

物語文芸の表現史 高橋 亨 三五〇〇円

ロシア原初年代記 國本哲男・山口巖・中条直樹ほか訳 一〇〇〇〇円

法と刑罰の歴史的考察—平松義郎博士追悼論文集—

平松義郎博士追悼論文集編集委員会編 一〇〇〇〇円

超低温物理 益田 義賀 四五〇〇円

医療の疫学—病気の転帰に関する研究—

ノエル・S・ワイス/青木国雄監訳 四〇〇〇円

所有と経営の経済理論 松尾 秀雄 二八〇〇円

Current Status of Cancer Research in Asia, The Middle East and Other Countries 和田武雄・青木国雄・谷内昭編 七〇〇〇円

二〇世紀国際政治史 福田茂夫・義井博・草間秀三郎 二〇〇〇円

近代イタリヤ農業の史的展開 界 憲一 五五〇〇円

財政再建と税制改革 水野 正一 三五〇〇円

国造りの歴史—中部の土木史—土木学会中部支部編 三五〇〇円

国際経済における日独の役割—日本と西ドイツの比較研究—

真継隆・Th・ダムス編 三二〇〇円

教育の心理 久世敏雄編 二〇〇〇円

心理学の窓から 内山道明 一八〇〇〇円

■関西大学出版部

西欧財政学と明治財政

戒田 郁夫 六七〇〇円

購買態度の購買分析 佐々木土師二 九五〇〇円

中論釈 明ひかな(こけい) 丹治 昭義 四七〇〇円

HSU KUANG-CHI AND ASTRONOMICAL REFORM

—Chinese Acceptance of Western Astronomy—

橋本 敬造 七五〇〇円

■法政大学出版局

誰がモーセを殺したか	ハンデルマン／山形和美訳	四三〇〇円
フロイト	ロラン・ジャカール／福本修訳	一四〇〇円
八ヶ岳の三万年―黒曜石を追って―	小泉袈裟勝	二〇〇〇円
メランコリーと社会	W・レペニース／岩田・小竹訳	三五〇〇円
意味の論理学	G・ドゥルーズ／岡田弘・宇波彰訳	三九〇〇円
新しい文化のために	ポール・ニザン／木内孝訳	三二〇〇円
パラジット―寄食者の論理―	セール／及川・米山訳	三九〇〇円
アシモフ博士のQ&A100	I・アシモフ／福島正実訳	一七〇〇円
奥羽社会経済史の研究／平泉文化論	〈森嘉兵衛著作集〉第一巻	九八〇〇円
碁へものとの人間の文化史・59	増川 宏一	二四〇〇円
太陽と巨石の考古学	J・アイヴィミ／酒井傳六訳	一七〇〇円
マヤ文明	D・アダムソン／沢崎和子訳	一七〇〇円
虐殺された鳩―暴力と国家―	H・ラボリ／川中子弘訳	二二〇〇円
現代心理論集	P・ブルジュ／平岡昇・伊藤なお訳	三三〇〇円
正常と病理	G・カンギレム／滝沢武久訳	二八〇〇円
ヒトと甲虫	林 長閑	一三〇〇円
フランス革命論	J・G・フィヒテ／榊田啓三郎	三五〇〇円
具象空間の認識論	F・ダゴニエ／金森 修訳	二七〇〇円
現代インド経済研究	絵所 秀紀	四八〇〇円
地域社会の民俗学的研究	岩井 宏實	九四〇〇円
脳と人間と社会	千葉 康則	一六〇〇円
スタンダール―夢想と現実―	鎌田 博夫	四五〇〇円
現代文明論としての哲学	中埜 肇	二二〇〇円
楽園・味覚・理性	W・シヴェルプシュ／福本義憲訳	二二〇〇円
後期資本制社会システム	オッフエ／寿福真美編訳	二九〇〇円
空想動物園	A・S・マーカタンテ／中村保男訳	一九〇〇円

うわさ

闇をひらく光	J・N・カプフェレ／古田幸男訳	二八〇〇円
分子革命―欲望社会のミクロ分析―	W・シヴェルプシュ／小川さくえ訳	二二〇〇円
労働者3へ日本社会運動史料・機関誌紙篇	フェリックス・ガタリ／杉村昌昭訳	二八〇〇円
クロード・レヴィ・ストロース〔原書改訂版〕	法政大学大原社会問題研究所編	一三〇〇〇円
現代社会像の転生	オクタビオ・パス／鼓直・木村栄一訳	一四〇〇円
パロックの生活	P・ラーンシュユタイン／波田節夫訳	三九〇〇円
ガリレオ研究	A・コイレ／菅谷暁訳	四五〇〇円
社会学思想の系譜	アブラハム／安江・小林・樋口訳	一九〇〇円
ドン・キホーテ頌	P・アザール／円子千代訳	二九〇〇円
■明星大学出版部	明星大学出版部編	一五〇〇円
児玉三夫対談集		
■早稲田大学出版部	堀江 忠男	二五〇〇円
現代を思索するⅡ	早稲田大学図書館編	二〇〇〇円
幕末・明治のメディア展	日本平和学会編	二二〇〇円
平和研究12号―エスニシティと平和―	中野幸一編	二〇〇〇円
奈良絵本絵巻集第1巻	竹取物語	一七〇〇円
科学哲学20―意識・機械・自然・科学とメタファー―	日本科学哲学会編	一七〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書二	椋斎書入倭名類聚鈔二	一五〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書二	住吉物語	二二〇〇〇円
奈良絵本絵巻集第2巻	中野幸一編	二二〇〇〇円

Enlightenment and Beyond 杉山忠平・水田洋編 九〇〇〇円
 Toward World of Economic Stability 鈴木淑夫・岡部光明 五六〇〇円

Nearshore Dynamics and Coastal Processes 堀川 清司 一五〇〇〇円

Theoretical and Applied Mechanics, vol. 36 今井功・塩入淳平 二〇〇〇〇円

The Himalayan Plants, vol.1 大場英章・S.B.Malla 二八〇〇〇円
 Static and Dynamic Behavior of Kurobe Dam 岡本 舜三 一八〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録 31 32 事務局編 各九〇〇〇円
 続再夢紀事一〈日本史籍協会叢書〉 八〇〇〇円

■東京電機大学出版局
 基礎と演習 工業熱力学 松永 省吾 三五〇〇円
 FORTRANの学び方〈コンピュータ学習シリーズ〉〔改訂版〕 高宮 英郎 一六〇〇円

電気用数学 微分・積分の基礎〔新訂版〕 須川 哲雄 二六〇〇円
 材料技術史概論 小山田了三 二四〇〇円
 図解シーケンス デジタル回路の考え方・解き方 大浜 庄司 一九〇〇円

第二種情報処理試験全問題解答集〔六三年春季版〕 二四〇〇円
 無線機器へ1技・2技・1通の徹底研究 横山 重明 一六〇〇円
 無線設備管理へ1技・2技・1通の徹底研究 久米川孝二 一六〇〇円

空中線系及び電波伝搬へ1技・2技・1通の徹底研究 安達 宏司 一六〇〇円

図解Z80 マイコン応用システム入門〈ソフト編〉

ニューセラミックスへハイテク選書 柏谷英一ほか 二三〇〇円
 フレッシュマンのための教養電気(上)―社会をリードする電気技 小山田了三 一四〇〇円

術の位置づけ― フレッシュマンのための教養電気(下)―社会をリードする電気技 宮入 庄太 一九〇〇円

術の位置づけ― 術の位置づけ― 宮入 庄太 二〇〇〇円
 高校生のためのFORTRAN―JIS基本水準による― 秋富勝ほか 一三〇〇円

基礎MS・DOS&BASIC―モジュール技法と知的空間― 黒田 康太 二〇〇〇円
 国際派の経済原論〈教養セミナー〉 出水 宏一 二〇〇〇円

■東京農業大学出版会
 日本庭園の特質―様式・空間・景観― 進士五十八 五〇〇〇円
 芝生地の収容力に関する研究 近藤 三雄 二〇〇〇円

A・C(アグリカルチャー) No.1「銘柄ブランド」 養父志乃夫 一〇〇〇円
 野生草花による景観の創造 一五〇〇円

21世紀農業展望シンポジウム記録 五〇〇円
 広島県「農山村の高齢化と地域経済振興」 五〇〇円
 埼玉県「首都圏農業と生活環境」 五〇〇円

東京「21世紀の森林―豊かな生活環境の形成―」 鈴木 充夫 二〇〇〇円
 野菜の価格形成と産地展開 鈴木 充夫 一〇〇〇円
 A・C No.2「水と暮らしを考える」 川鍋 祐夫 九〇〇円
 図解テキスト「草地・飼料作物学」

■東京理科大学出版会

異文化への理解
なぜ人は書くのか〈認知科学選書16〉 森 巨編 一八〇〇円

考古学入門 茂呂雄二・無藤隆編 一八〇〇円
日本の労働者参加 鈴木 公雄 一九〇〇円
日本帝国主義史2 世界大恐慌期 仁田 道夫 五八〇〇円
分裂病の精神病理学 大石喜一郎編 四八〇〇円
海底林 土屋健郎編 四二〇〇円
力学15講 藤井昭二・奈須紀幸編 六八〇〇円

昆虫の発生生物学 岡田 益吉 二〇〇〇円
古代和歌の発生—歌の呪性と様式— 古橋 信孝 四〇〇〇円
貴族院委員会速記録 28 貴族院事務局編 九〇〇〇円
衆議院委員会速記録 28 衆議院事務局編 九〇〇〇円

Horizons of Biochemical Engineering 合業修一編 一五〇〇〇円
Man'yoshu, Vol. 1(Pbk.) イアン・英雄・リーブ訳 三〇〇〇円
Evolution and Coadaptation in Biotic Communities 河野昭一ほか編 九〇〇〇円

Trade Associations in Business History

山崎広明・宮本又郎編 六〇〇〇円
自己意識の心理学〔第2版〕 梶田 毅一 一四〇〇円
初期プラトーン哲学 加藤 信朗 四二〇〇円

中世東国史の研究 中世東国史研究会編 八六〇〇円
相互依存時代の国際摩擦 山影 進 五四〇〇円
財政学 貝塚 啓明 二五〇〇円

体制と変動 庄司興吉・矢沢修次郎ほか 二五〇〇円
転換期の国家・資本・労働 広田・奥田・大沢 六九〇〇円
電磁気学入門 阿部英太郎 二二〇〇円
地殻の物理工学 石井 吉徳 三六〇〇円

神経と化学伝達〈UPバイオロジー69〉 後藤 秀機 一四〇〇円
衆議院委員会速記録 29 衆議院事務局編 九〇〇〇円
衆議院委員会速記録 30 衆議院事務局編 九〇〇〇円

Fukuzawa Yukichi on Japanese Women

Eichi Kiyooka 四五〇〇円

チベット(下)〈東洋叢書4〉 山口 瑞鳳 二八〇〇円
比喩と理解〈認知科学選書17〉 山梨 正明 一八〇〇円
アメリカ経済史II 鈴木圭介編 五六〇〇円

高山寺古典籍纂集 編集代表 築島裕 二八〇〇円
廣開土王碑原石拓本集成 武田幸男編者 二六〇〇円

三井八郎右衛門高棟傳 三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編 一六〇〇〇円

転換期の福祉国家(上) 東京大学社会科学研究所編 四八〇〇円

日本政治史I 升味準之輔 一八〇〇円

英米法と日本法〈英米法研究3〉 田中 英夫 五九〇〇円

価値論の展開 小幡 道昭 四八〇〇円

基礎課程 統計および統計学 林 周二 二八〇〇円

TSPによる経済データの分析 和合肇・伴金美 三八〇〇円

現代イギリスの労使関係(下) 戸塚秀夫ほか 七〇〇〇円

新しい量子化学(下) A・ザボ&N・S・オストランド／大野公男ほか訳 三八〇〇円

生物学資料集〔第3版〕 生物学資料集編集委員会編 二四〇〇円
原典放射線障害 館野之男編訳 一四〇〇円
疾患からみた神経回路網 豊倉康夫・岩田誠編 二八〇〇円
材料の組織と機能〈材料テクノロジー7〉 伊藤邦夫ほか 二八〇〇円

Health and Illness in Changing Japanese Society 園田 恭一 五二〇〇円

Matsunae's Contribution to History 白井久也構成 七〇〇〇円

非行抑止に関する社会心理学的研究 高橋 良彰 八五〇〇円

水理学の基礎 星田義治・濱野啓造 三五〇〇円

原子力発電の諸問題 日本物理学会編 二四〇〇円

日本の甲虫 佐藤正孝編 二八〇〇円

Vegetation Ecology and Creation of New Environments 宮脇昭ほか編 一八〇〇円

統計学の基礎と演習 小森・山下・水野 一八〇〇円

COBOL 入門 大田需・長江彰編 二五〇〇円

生物時計の遺伝学 大島 長造 二九〇〇円

数え上げの手法〈組合せ論演習①〉 L・ロバッシュ 二七〇〇円

グラフの構造〈組合せ論演習②〉 L・ロバッシュ 二五〇〇円

日本産稚魚図鑑 沖山宗雄編 一八〇〇円

■東京大学出版会

スポーツの科学 浅見 俊雄 一二〇〇円

ソ連現代政治 下斗米伸夫 一八〇〇円

現代の社会人類学2 伊藤亜人 関本照夫 船曳健夫編 二八〇〇円

現代の社会人類学3 伊藤亜人 関本照夫 船曳健夫編 二八〇〇円

イギリスの社会保障 スウェーデンの社会保障 社会保障研究所編 三八〇〇円

私の都市工学 社会保障研究所編 三八〇〇円

森林の物質循環〈UPバイオロジー67〉 高山 英華 二〇〇〇円

低温技術〔第2版〕〈物理工学実験7〉 堤 利夫 一二〇〇円

グローバルテクトニクス―地球変動学― 小林俊一・大塚洋一 二四〇〇円

貴族院委員会速記録 25 杉村 新 三八〇〇円

衆議院委員会速記録 25 貴族院事務局編 九〇〇〇円

衆議院事務局編 九〇〇〇円

開拓使日誌(全六冊セット) 日本史籍協会編 四五〇〇円

海と文明 浜田隆士編 二四〇〇円

からだ・認識の原点〈認知科学選書15〉 佐々木正人 一八〇〇円

韓国のキリスト教〈東洋叢書5〉 柳 東植 二四〇〇円

個(わたし)と共同性(わたしたち)〈新しい世界史9〉 吉沢 南 一八〇〇円

科学史研究入門 中山茂・石山洋 二四〇〇円

近世の村社会と国家 水本 邦彦 五〇〇〇円

中世村落と荘園絵図 小山 靖憲 四五〇〇円

西洋古代史料集3 古山・中村・田村・毛利・他編訳 二四〇〇円

価値論の射程 山口 重克 三二〇〇円

農業水利と国土 志村 博康 四〇〇〇円

材料のプロセス技術I〈材料テクノロジー〉 梅田高照明ほか 三〇〇〇円

貴族院委員会速記録 26 貴族院事務局編 九〇〇〇円

衆議院委員会速記録 26 衆議院事務局編 九〇〇〇円

テレビと子どもの発達 無藤 隆編 一八〇〇円

デュ・プロセス〈英米法研究2〉 田中 英夫 五四〇〇円

不均衡理論 小谷 清 三八〇〇円

産業・労働〈リーディングス日本の社会学9〉 稻上毅ほか 三〇〇〇円

社会科学の計量分析 鈴木雪夫・竹内啓編 三六〇〇円

出稼ぎの総合的研究 渡辺栄・羽田新編 六七〇〇円

情報の世紀を生きて 猪瀬 博 二四〇〇円

物語文学成立史 藤井貞和 一二〇〇円

貴族院委員会速記録 27 貴族院事務局編 九〇〇〇円

衆議院委員会速記録 27 衆議院事務局編 九〇〇〇円

言語とコミュニケーション 竹内敬人編 一三〇〇円

明日の流行キーワード辞典 丸の内企画人クラブ 一三〇〇円
新時代の人材育成戦略 江幡 良平 二〇〇〇円

■玉川大学出版部

大学教育改革のダイナミックス―カリキュラムをいかに変革するか
J・B・L・ヘフアリン／喜多村和之ほか訳 三五〇〇円
美学〈近代美学双書〉 バウムガルテン／松尾大訳 八五〇〇円
ルソーとその時代〈教育の発見双書〉

押村襄・押村高ほか 二四〇〇円
芸術と社会〈芸術学研究双書〉 山本正男監修 四二〇〇円

日本近代学校成立史の研究 多田 建次 五八〇〇円
大学教授のためのティーチングガイド K・エブル／箕輪成男訳 二八〇〇円

楽しく覚える漢字の本 全六巻 一年生〜六年生 玉川学園編 各二二〇〇円

備前心学をめぐる論争書―『摧邪評論』と『儒仏論叢書』―
小澤富夫・山本真功編著 九〇〇〇円

保育者のための幼児の歌50選 玉川学園女子短期大編 一五〇〇円

■中央大学出版部 U・ドゥローブニク&M・レービンダー編
法社会学と比較法 真田芳憲・後藤武秀訳 三〇〇〇円

工業の空間構造―中国・韓国・日本の比較― 村田喜代治編 二八〇〇円

地域をなぜ問いつづけるか―近代日本再構成の試み― 金原 左門 四八〇〇円

西独民事訴訟法の現在 P・アーレンス編／小島武司編訳 二九〇〇円

英米法における名誉毀損の研究 塚本 重頼 四八〇〇円
海事国際私法の研究―便宜置籍船論― 山内 惟介 二八〇〇円
西ドイツ比較法学の諸問題

D・ヘーンリッヒ編／桑田三郎編訳 四八〇〇円
トマス・ハーディー―その作品の変遷―

デイヴィッド・ヒュームと18世紀英国思想―解題目録―〔補遺〕
中央大学図書館編 八〇〇〇円
中央大学図書館編 五〇〇〇円

■東海大学出版会 中園明信・桑村哲生編 二六〇〇円

魚類の性転換〈動物⑨〉 工藤 昌男 一六〇〇円
改訂版海からの発想〈東海科学選書〉 水野信彦・後藤晃編 二八〇〇円

日本の淡水魚類 野坂 康雄 三五〇〇円
工業計測システム入門

Toward an Understanding of Budo Thought 松前重義編 六〇〇〇円

SIPRI年鑑1987 ストックホルム国際平和研究所編 一五〇〇円

動物の社会 伊藤 嘉昭 一七〇〇円
翔とよ 伝統芸能 森田拾史郎 二〇〇〇円
トンボの繁殖システムと社会構造〈動物⑥〉

Expand Your World 東和敬ほか 二八〇〇円
寄生バチの世界〈動物⑫〉 甲斐迫ほか 九〇〇円

イラン学〈足利惇氏著作集①〉 佐藤 芳文 二〇〇〇円
伊藤・井本編 一六〇〇円
随想 思い出の記〈足利惇氏著作集③〉

留学生の化学 高樹・渡瀬編 一〇〇〇円
田辺 清一 二五〇〇円

The Life and Struggles of a Fighter for Peace: Shigeyoshi

新刊案内 '87・10 / '88・3

■北海道大学図書刊行会

北海道の植生

北海道の自然保護〔増補版〕

植物栄養学論考

Comparative Aspects of Circadian Clocks

日本農業の経営問題

パステルナーク研究

Lattice Defects in Ice Crystals

■慶應通信

現代アメリカ社会と司法―公共訴訟をめぐって―

合理的期待入門

近代経済思想史

オーストラリア労働組合入門―労働組合の構造と機能―

B・フォード&D・プラウマン編集／関根政美・薫訳

視覚障害児のための言語の理解と表現の指導 文部省

近代日本における国家と倫理 日本倫理学会編

エンクロージャー ターナー／重富公生訳

公正と効率―公益事業料金概論―

E・E・ゼイジャック／藤井弥太郎監訳

伊藤浩司編 九八〇〇円

俵 浩三 一八〇〇円

石塚喜明編 三二〇〇円

広重力・本間研一編 九八〇〇円

七戸 長生 三二〇〇円

工藤 正広 四五〇〇円

東 晃編 六〇〇〇円

大沢 秀介 二八〇〇円

M・カーター・R・マドック／浜田文雅・千田亮吉訳 二〇〇〇円

小泉 信三 二〇〇〇円

三〇〇〇円

一三〇〇円

二八〇〇円

二五〇〇円

一八〇〇円

一八〇〇円

経済科学と批判的合理主義―ドイツと日本の知的交流

G・シャントツ／小島三郎編 三二〇〇円

■産業能率大学出版部

「たとえ話」の効用

戦略型幹部職の時代

自治体のオフィス革新戦略

管理者能力

問題解決型人間

節税のための経費のとらえ方

日本近代経営史

不良ゼロ・クレームゼロのための完全生産のしくみとその実践

建設業の儲け倍増スキーム管理戦略

ビジネス戦士よ若死にすることなかれ!

新さわやかマナーブック

改訂新版・これだけは知っておきたい税金対策

風林火山の戦略戦術

消費財メーカーの営業力強化戦略

セールス文書の書き方

日本企業エグゼクティブの研究

「臨済録」に学ぶ経営の活路

中山 正和 一五〇〇円

松尾 友重 二五〇〇円

茶谷達雄・中田重光 二五〇〇円

北岡 俊明 一五〇〇円

田中 敏夫 一五〇〇円

東 勇幸 一五〇〇円

野田 信夫 八八〇〇円

西塚 宏 三八〇〇円

中谷 義昭 一八〇〇円

越智 宏倫 一五〇〇円

浜利子・黒田秀子 一三〇〇円

東 勇幸 一五〇〇円

渡辺 硯水 一三〇〇円

小峰 昭雄 一三〇〇円

安田 賀計 一三〇〇円

アラン・バート 一五〇〇円

公方 俊良 一五〇〇円

早稲田大学出版部

▼大井邦雄監修「エリザベス朝喜劇10選」シェイクスピア研究をより深めるために、これまでわが国では未紹介であったエリザベス朝の作者による傑作喜劇十篇を翻訳紹介する。全十巻二月から刊行開始。第一回配本は『アビントンの焼きもち女房たち』。三か月に一冊ずつ配本▼杉本つとむ著「江戸・東京語

二語話」 「あいびき」から「渡りに舟」まで百十八の語彙を取り上げ、それぞれの意味・用法

例文等を探り、汗臭くもエネルギーに富んだ江戸っ子の言葉の世界を生き生きと描く▼早稲田人物叢書の第一号、後藤乾一著『原口竹次郎の生涯』大隈侯生誕百五十年記念の復刊『大隈重信叢書』全五巻、『早稲田大学歌集』——いずれも大学のUI運動に呼応した刊行物

名古屋大学出版会

〈話題の本〉

中部地方の土木事業の歴史を一般向けに紹介した『国造りの歴史—中部の土木史—』（定価三五〇〇円）がこのほど名古屋大学出版会から発行され、注目されている。土木学会中部支部の設立五十周年記念事業で、地方の土木史を一般向けにまとめた本は全国でも初めて。取り上

げているのは、大正時代までの代表的な土木事業やユニークな工事。土木工学の専門家や郷土史家が特色あるものを二十の物語にまとめている。さらに史料編として百件の土木事業を紹介。中部地方は木曾三川の治水工事など数例を除くと、大規模な土木工事は少なく、これまであまり知られていなかった。（昭和六十三年二月二十九日付「中日新聞」より）★好評第2刷出来！

大学出版部ニュース

関西大学出版部

昭和六十二年度に十冊の図書を刊行したが、そのうち英書の出版三冊が含まれる。すなわち①“International Regulation of Nuclear Warfare”（藤田久一）、②“TSU KUANG-CHI AND ASTRONOMICAL REFORM”（橋本敬造）、③“MIN YAKU YAKKI-AT”（福井七千）である。本学では、国際交流の拡充・

進展に伴い、洋書の出版意欲は年々高まる兆しがあり、外国人教員による出版など、今後種々の形態の刊行が予想される。反面、円高傾向が続く状況のもとで外国での販売に不安も残る。

しかし洋書の刊行は、採算を全く度外視しての研究成果の発表という観点から、大学出版部の存在を一層価値あらしめる仕事の一つとなろう。なお、洋書づくりの技術については、今後の研究に俟つべきものがある。

九州大学出版会

▼六二年度文部省助成図書大著五年期限内刊行必死の思いであった。野村暢清『宗教と社会と文化—宗教的文化統合の研究』宗教学、社会学、民俗学、人類学に亘る宗教文化の時間、空間、社会構造の分析・解明。石田忠彦『坪内逍遙研究—附・文学論初出資料』「逍遙とは何かと問われて、マイクロ・フィルムの説

みにくさと答える人が案外多いのではあるまいか」（あとがき）。変体仮名を読み総ルビを組んだ印刷所に感謝。森本芳樹編著『西欧中世における都市—農村関係の研究』研究史と史料類型に留意し地域史の手法を駆使、多面的解明。金城光子『舞踊における美への視点』舞踊認知の因子分析的研究と琉球舞踊の位置づけ。原島重義編『近代私法学の形成と現代法理論』わが国サヴィニー研究の一里塚。

東京農業大学出版会

学術映画シリーズ・第9巻「日本の慣行稲作—田植の方法」

日本の稲作は、長く人力と畜力を中心の技術体系であった。これが昭和三〇年代後半から機械中心へと大きく変化した。もはや今日では、かつての風土に根ざした田植や収穫の作業風景はほとんど見られなくなった。そして早晩のうちに、手作りの

農作業体系は消滅することが予想され、風土さえも変貌をみせはじめている。

そこで、いまはわずかに残る手作り農法ともいふべき田植と収穫乾燥方法(第10巻)に視点を当て、科学的農作業体系として記録分析した映画である。

農作業体系とは、風土や文化を形成したそれぞれの民族の知恵である。それが見落とされることなく、将来の日本稲作技術に貢献することを願っている。

東京理科大学出版会

東京理科大学の創立をさかのぼれば、明治のはじめ、理学の普及を掲げて日本の開化発展をはかったのにはじまる。百年前に発刊した「東京物理学学校雑誌」は当時類書の稀少な時代に貢献したと自負している。

戦時中に休刊となったが、一九八四年から「SCI」と理大の頭文字をとり、姿を変えて登場

した。B5八〇頁位の雑誌ではあるが、大学の総力を挙げて編集し、時代に沿った知識を提供することに苦心している。

現代は科学知識なくして成長することはむずかしい。

この雑誌は広く一般人に生涯教育の一環として、是非ご愛読をすすめるものであります。

(定価四三〇円 年間購読会員五〇〇円)

法政大学出版局

「技術の歴史を論じて、これほど面白い本に近來出合ったことがない：朝日新聞」と絶賛をあげた『鉄道旅行の歴史』の著者W・シヴェルプシュの新著が二点、続いて刊行されました。

▼『菜園・味覚・理性』は、嗜好品の消長に時代精神、社会の欲望を読みとる「味覚のイデオロギーの歴史」であり、「こお

どりしたいような知的刺激：毎日新聞」にあふれています。

▼『闇をひらく光』は、産業革命を頂点とする照明技術の歴史ですが、バジュールのいわゆる「管理された光」の社会的側面を論じて、時代の哲学と社会と技術の総体に迫るユニークな〈光の思想史〉でもあります。

『鉄道旅行の歴史』加藤二郎訳
『菜園・味覚・理性』福本義憲訳
『闇をひらく光』小川さくえ訳
A5判上製／定価各二二〇〇円

明星大学出版部

『児玉三夫対談集』明星大学出版部編は、対談者が教育の専門家ということもあり、教育に関するものを選んで上梓した。田尾一との「リンハルトとゲルトルート」鮎坂二夫との「ペスタロッチを語る」などは、ペスタロッチの研究者の一人としての目をはしばしに伺えて興味深い。

また、大学の図書館のことは二編集録されている。個人の収集家を中心にして図書の収集に貢献したとして、トマス・モア・メダルを受章したいきさつ、シェイクスピアライブラリーのこと、稀覯書のこと、大学図書館が果たす使命などが語られている。他に「私立大学を語る」「教師をつくる」「大正デモクラシーと新教育」「明日の教育を考える」等、教育の諸問題が中心である。(定価一五〇〇円)

大学出版部ニュース

中央大学出版部

本年は小部の創立四十周年になる。法曹界に好評を博した、「法律学説判例総覧」の刊行を手はじめに法・経・商・文の各学部機関誌、中央評論などの発行と併せて、学内・外の執筆者による専門、教養の多岐分野に亘る単行本四百点に余る刊行の歴史が滔々と続いた。戦後の歴史と共に歩んで四十年、この間

大学出版部ニュース

東京大学出版会

『異文化への理解』（一八〇〇頁）が好評である。

本書は、昨年春の第67回東京大学公開講座を収録したものであるが、当時、九百余人もの聴講申込みがあり、満員札止めとなったテーマだけに、その売れ行きが注目されていたもの。

ところで、「東京大学公開講座」は、これまで四六点を刊行

の数々の著作を目の前にして、歴史の重みが身にこたえる。思想的転換、科学技術の進歩、社会機構の変遷、それらが常に活字と共に息づいている。

今年四十周年という節目を記念して、ブックフェア、式典、そして年史の刊行を予定している。

振り向くことから見離され、唯ひた走った四十年である。そして今、四十年を期にまた新たな飛翔を試みる。

してきたが、そのうちベストセラーを挙げると『酒』『公害』『日本の都市問題』『言語』『親と子』と続く。

さて、続刊『進化』は、生物の進化論にとどまらず、天文学・地球科学・心理学・哲学などさまざまな観点から「進化」にアプローチするというユニークな内容となっている。「進化ははたして進歩か？」といったことを考える際の格好の読み物としてお薦めしたい（五月刊）。

東海大学出版会

東海大学の創設者松前重義の「著作集」全10巻の刊行を第一弾に東海大学出版会が出版活動を開始して二十五周年を迎えた。この間、およそ千点の新刊書を世に出してきたが、総合大学を背景とした出版活動だけに、教育、研究、社会啓蒙を三本柱にして、きわめて広いジャンルの書籍を上梓しつづけてきた。

松前重義は、戦時下の昭和十二年、望星学塾を設立した。戦後更に、科学技術と人間性の融合をめざす東海大学を創立するが、二十一年には学塾の機関誌「望星」を信子夫人を編集人として発行した。出版会の原点は「望星」発行時点にも溯れるはずで、松前のその志が今日価値ある学術書、研究書など年間五十点上梓しつづける大学出版に具現化されているのであろう。（週刊読書人3月28号より抜粋）

東京電機大学出版局

電子出版の一環として、大学の研究成果を基に、CD・ROMによるCAIシステムを開発し、モニタ校へ納入を開始した。

CD音声辞書『サウンドイクシヨナリー』は、CD・ROMという新しいメディアに、音声付き英語辞書を収納し、模範発音（ネイティブスピーカー）と学習者の発音をパソコン上で波形

比較することで、より効果的に語学学習ができるようにしたCAIシステムである。

第一弾として、中学生にとって必要な単語を収めた「一三三三基本英単語」を作成し、さらにソフトの充実をはかる予定である。パソコンは日電のPC9801VMで、専用ボードを収めたドライブユニットをティアップクと共同開発した。

さらに研究を続け、電子出版に積極的に取り組む所存である。

北海道大学図書刊行会

■ロシア文学といえ、かの二葉亭以来我が国ではそれなりの蘊蓄を誇れる研究実績がある、と思われている。トルストイ然り、ドストエフスキー然り、だがそのいずれもが散文で、韻文に関するものは、ツルゲーネフの「散文詩」を貴重な例外とする。他は実は無に等しいことは、あまり知られていない。■「ドク

大学出版部ニュース

産業能率大学出版部

サムエル・ウルマンの『青春という名の詩』（宇野収・作山宗久著）が、発売後一年半にわたるにもかかわらず好調に売れている。一部の著名人には知られていた詩及び原作者の詳しい内容が、詩を愛唱する財界人のニュースとしてマスコミによって紹介され、広く一般に知られたためと思われる。毎月二回平

トル・ジバゴ」でノーベル賞に推されながら東西の政争に巻き込まれ、国内での作品紹介すらままならなかったパステルナークが、「ペレストロイカ」でようやく蘇生する。本来が詩人のため、重訳による前述の作品の出版を除き、その本格的紹介が遅れていた■工藤正広氏の「パステルナーク研究」はこうした間隙を埋めるものとして、正に文学研究の礎としての価値が窺われた力作である。

均の重版により、すでに発行部数も十五万部に達している。

また、昨年末に刊行した『日本近代経営史』が学界、財界から注目されている。著者は、日本の経営学の泰斗といわれる野田信夫氏。日本企業が明治以前から受けていた社会慣習の分析から始まって、財閥の成立、経営理念など、経営の近代化までを総合的に辿り、随所に新しい理論を構築しつつ解説した七五〇頁に及ぶ大冊である。

慶應通信

●前田重治著『不適応の精神分析—心の健康を育てる—』（定価二六〇〇円） 今日の流れ的で不安定な社会においてわれわれに迫る大きなストレスに対して、障害を起こさずに生活してゆくためには、心の健康を守る自衛策が必要であり、また自我の未熟な子どもは家庭や学校において適応力を育ててゆく配慮

玉川大学出版部

多田建次著『日本近代学校成立史の研究』（定価五八〇〇円） 明治初期における各地の学校教育のいとなみは、地域の近代化をすすめるうえで多大な影響を及ぼしてきた。それらに関する基本資料の散逸、史料探索の作業の必要のために空白部分が多い。本書は比較的豊富な資料をこのす福沢諭吉に深い関係をも

が必要である。本書はこれらの諸相を様々な角度からとりあげた論説を集録している。

●山本昌邦編著『病氣の子どもの理解と援助—全人的な発達をめざして—』（定価一五〇〇円） 長期あるいは一生を病氣とともに暮らさざるをえない子どもたちに、それぞれの能力を発揮し充実した生活を送らせるための父母・教師・医療関係者らの子ども達の様子や援助の仕方に対する正しい理解を説く。

つ地域を対象に史料を調査。福沢諭吉の教育構想・理念・実践の軌跡を研究。福沢の成功しかわらず成功しなかった史的側面を明確に別出している。

既刊『日本教育史資料の研究』とともに、日本の近代史、教育史の空白部分を埋める貴重な研究書であり、地域教育史研究でも新局面を拓いている。地味で脚光を浴びにくい分野の刊行であるが、必要かつ良書と自負。

五周年では三校の入退会があつて同じく十校、二十周年は十四校、この二十五周年では十六校となつている。全国約五〇〇大学からみれば、いかにも少い。もっとも九州大学出版会は、九州・沖繩七県と山口県をふくむ広域で二十数校の国公立大学を組織内に包含し、名古屋大学出版会も東海地区の主要大学を包括し、参加校は総計四十校をこえている。それでも、小協会が設立の範としたアメリカ大学出版部協会はもとより、後続の韓国、中国にも及ばない。二十周年の当時四十五校を組織した韓国大学出版部協会はいま六十校をこえ、協会の組織のなかつた十二大学出版部の中国は全国六地区の連合体として約一〇〇校の組織体となつている。

国公立大学では、法制的にさまざまな制約があつて容易に大学出版部は出来ないが、学内の正式機関で設立が諒承された京都大学の出版部がまだ発足しないのはなんとも残念である。それでも東北大学はじめ、一橋大学、東京外国語大学、神戸大学等に設立の気運があるとさくのはうれしいことである。

私立大学はどうだろうか。出版活動は多く収益部門としてとらえられるのだが、出版部設立の法的規制はなにもないといつてよい。むしろ建学の精神を發揚して、大学の發展のためにも、出版活動は不可欠のものであり、すでに活動中の大学も少くない。

大学出版部を設立するには、広く学内各層の支持をうけるのが望ましいが、最も重要なことは、学長・理事長等の代表責任者がその意義を認め、事業運営にあたる人材を確

保することである。研究成果を發表すること、教育の便宜をはかること、社会の啓蒙を心がけることなど、いづれも出版という手段によつて、もっともよく効果をあげることが出来る。編集・營業等の実務については協会の協力も可能であろう。さらに国際的視点からみれば、日本の本を世界の本にすることは必然的な方向である。もとよりその表現は外国語を使用することが有効ではあるが、次第に、日本語の読者が世界的にひろがりつつあることも事実である。その先頭に立つのが大学出版部であるといつても過言ではあるまい。

最近実施された出版物の複写実態調査によれば、全複写枚数は年間一五九億枚で、うち出版物からは約九%の十四億枚である。大学だけで見ると五億枚のうち四〇%の二億枚、さらに大学図書館では六、八五〇万枚のうち六四%の四、三八〇万枚が出版物から複写されている。大学における出版物コピーの多さがわかる。近く著作権の集中的処理機構が設立されるが、わが大学出版部協会も著作権者と出版権者の双方に深い関連をもつものであり、将来会員校が増大し、著作権者であり利用者でもある大学教官と出版者団体に相当する大学出版部協会が包括的な契約を結ぶようになるかも知れない。

これまでと同じように、これからも「大学出版」の道はせまく厳しいだろうが、協会に結集する十六大学出版部二〇〇名の同志は、さらに結束をかため、一校でも多く新しい仲間が参加できるように一歩一歩道を切り拓いて欲しい。

られたことはきわめておめでたいことであり、心からお祝い申しあげます。

あらためて設立の趣旨を読み返し、その後の歩みを辿りながら、そこにさまざまな思いが交錯しますが、この二十五年は大学の出版活動にとって、必ずしも恵まれた環境とは言えなかったように思われます。

いうまでもなく、親大学と出版部との関係は、大学の教育・研究・啓蒙機能によって結ばれており、そのための役割を期待されて出版部の存立意義が謳われております。しかし、内情に少し踏み込んでみると、ことはそれほど歯切れがよくないようです。教材作製、研究成果発表、啓蒙活動のいずれの場合にも、学内当事者との間に白熱した議論が闘わされ、緊張した関係の中で優れた出版物が生みだされていくというのが望ましき構図でしょうが、現実には亡羊の嘆が聞こえてきます。

その原因はどこにあるのでしょうか。さまざまな見方が可能でしょうが、なんといっても一つには、日本の大学社会の活性化が著しく遅れていて、七〇年代、八〇年代に急速に変容を遂げた他の社会分野との乖離が極限に達しているためでしょう。製作・販売などの多くの面で半身を外界に曝している大学出版部は、“コップの外の嵐”と“桃源”の境に身をおく座りのわるい存在とでもいえましようか。もちろん、先端的な研究者は国際舞台での厳しい評価の中で学問水準の向上に献身しておられますし、素晴らしい教育成果をあげている大学人は数多くおられますが、大学出版部が所属しているシステムとしての日本の大学が活気を

失っていることは今や多くの人の指摘するところですが。

しかしながら、このような困難な状況の中にあるにもかかわらず、大学出版部協会としての二十五年の活動には瞠目すべきものがあり、歳月が確実に蓄積されてきたことはご同慶の至りです。初代箕輪幹事長のもとでグローバルな視野での好ましい離陸が行われ、中平幹事長によって組織固めと協会としての流通ルートが開拓され、石井幹事長によって日本生命財団の刊行助成制度が導入されて、各大学出版部のバックリストに誇るべき学術図書が加えられていることは喜ばしい限りです。

国際的にも国内的にも、潮の流れは激しく移り変わっていることですから、遅れているとはいえず、大学が真に望ましい活性化の洗礼を受け入れる日は意外に近いかも知れません。四分の一世紀にわたって蓄積されてきた協会の力が、新鮮な空気の中で存分に発揮される好機の到来が予感されます。ご発展を心から期待しております。

新しい大学出版部の参加を

中平 千三郎

(東京大学出版会常任顧問
大学出版部協会前幹事長)

わずか十出版部で設立した大学出版部協会の会員は、十

回の有志会合を開いて、大学出版部存在の位置付けを確認いたしました。つまり、大学には、知識の保存、即ち教育、及び知識の向上、即ち研究という二面の他に、もうひとつ、知識の啓蒙という面があるので、この三つめの「啓蒙」という概念に、大学出版部存在の柱を定める、というものです。そして、大学出版部協会の規約等を定め、幹事長には箕輪さんが、幹事には渡部良吉先輩（岩波書店幹部から早稲田大学出版部に移られた）と小生が選ばれ、雑用係として色々お手伝いをした記憶があります。

これは余談ですが、東大赤門の側の「百万石」という料理屋で、会合を行ったことがあります。この店には、棟方志功氏が若い頃、酒代に窮したとかで置いてあった絵が一本ばかりあり、それをありがたく拝見しました。赤坂の「ミカド」というキャバレーにも、当時、棟方画伯の大屏風絵があって、棟方ブームのはしりだった頃のこともあって、非常に強い印象をうけました。後でもう一度見たいと思いつつも、あれから「百万石」には行っておりません。

昭和三八年六月一日、大学出版部協会設立総会を済ませ、設立記念パーティーを開こうということになり、小生が準備を引き受けました。まだ資金もない頃でしたが、日本の大学出版部協会の志を表すにふさわしい格式を求めようということになり、白金迎賓館を使わせてもらおうように、諸方面と西武とにかけ合いました。努力のかけがあつて、開催は七月一日に実現しまして、荒木萬寿夫文部大臣、チャールズ・ファーズ米国公使、茅誠司東京大学総長、大浜信泉早稲田大学総長、丹羽保次郎東京電機大学学

長、谷川徹三法政大学総長など、百数十名の出席者を迎えることができました。前述の方々のほか、出版、取次関係の方々からの挨拶もあり、盛会で安堵したことを強く記憶しております。

それからの三、四年は、またたく間に過ぎてしまいました。この間、協会発足を踏み台に、各大学とも相当の業績を残しましたが、その後、数年大学紛争のために、協会活動が停滞せざるを得なかったのは残念なことでございます。小生も独立のため退職し、幹事を辞任いたしました。

その後、国連大学出版部に転職された箕輪さんとは、毎年フランクフルトのブックフェアでお目にかかります。また、出版仲間の会合等で東京電機大学出版局の高野、原野両君と偶々お会いした機会に、協会発展の経過を聞くことができ、その着実な歩みに驚くと同時に全く御同慶の至りと陰ながら喜んでおります。各大学・協会の、今後益々の御発展をお祈りして、筆をおきます。

創立二十五周年によせて

田口 迪太郎

（玉川百科刊行会
前玉川大学出版部部長）

大学出版部協会が創立二十五周年の記念すべき年を迎え



1972年、アジア太平洋地域大学出版部会議を東京で開催。
左端が筆者。

リスにはいまだに大学出版部協会はできない。スペインなどに大学出版部協会はできたようだが、その活動はほとんど聞こえてこない。

しかし、現実には初代幹事長の懷疑主義にもかかわらず、生み落された協会は一人歩きして発展への途をたどっている。とくに日本生命財団の刊行助成の意義は大きい。大学出版部がグループとして独占的にはじめて継続的な補助金の対象となったことを意味するからだ。私の懷疑主義もいくらか修正しなければならないかな、と考えている。

大学出版部協会設立の頃

三井 数美

啓学出版機社長
元東京電機大学
出版局業務課長

確か昭和三七年頃、東京大学出版会の箕輪成男さんがAUP（アメリカ大学出版部協会）会員の有力な大学出版部を歴訪されました。そして、その年の六月、当時ケネディ大統領が力を入れていた、ハワイ大学の East West Center へ行われた太平洋地域学術出版会議に出席された後、帰国されました。ただし、太平洋地域といっても、大学出版部協会があったのはアメリカだけだったので、帰国後、日本にも作ろうと、熱心に呼びかけられたのです。当時の日本では、大学出版部を持っている大学は一〇未満でしたし、その内容や理想にもさまざまなものがありました。

しかし、アメリカ側からの強い呼びかけもあり、それは大学出版部興隆のためにも、ひとつ努力してみようということになりました。昭和三八年早々、各大学に呼びかけて、東京大学出版会で懇談会を催しました。これが、出席した八大学の賛同を得まして、第一回設立準備会に切り替わったと記憶しております。その後、二、三回の例会、数

アイデンティティ

箕輪 成男

(愛知学院 大学教授
大学出版部協会初代幹事長)

協会が誕生して二五年になる。勘定してみると、その半ばを越す一三年の間、初代幹事長の職を汚したことになる。といっても紛争とその直後の数年間、協会は鳴かず飛ばずだったから、私の幹事長としての最長不倒距離も、協会への貢献度から見ると、大いに割引しなければならぬ。

大体困ったことに、日本における大学出版部と大学出版部協会の可能性と妥当性について、私は必ずしも楽観的でないのだ。

そもそも協会という組織が社会的に有力であるためには、少くともそのグループが独自のアイデンティティを持っていなければならない。社会的に際立って、他のいかなるグループとも異なるアイデンティティがあり、従ってまた社会的にそのグループの独占する重要な社会的領域があつてはじめて、グループの社会的発言力は強くなる。

アメリカの大学出版部はグループとして、そうした社会的に明確なアイデンティティをもっている。人文・社会に

おける一次情報的研究書出版者としての基本性格である。AAUP（アメリカ大学出版部協会）のすべてのメンバーが同質的にこの領域の出版者であり、かつAAUPメンバー以上はこの領域で出版する出版社が、グループとして強力には存在していない。だからAAUPグループはアメリカにおける人文社会の一次文献出版者として最強最大のグループであり、その立場で社会的に強い発言力をもっているのだ。政府も財団も大学も、そうした明確な非営利的社会機能集団としてのAAUPグループに対し、財政援助を与えるという社会的合意を形成している。

国情は全く違つても、たとえば中国の大学出版部もまたはつきりと、そうした同質性と独占性をもっている。高等教育の急拡大という社会的要請の中で、大学出版部は先ず大学教科書の供給者として、次いで研究成果の発表者としてのアイデンティティを明確に確立しているのだ。同じことが韓国やマレーシアなどの大学出版部協会についてもいえる。

ところが出版の歴史を異にするわが国の場合、大学出版部協会会員出版部の出版物の性格は多様であり、かつどの分野でも独占的地歩を占めていない。だから集合としての協会の社会的発言力も制約されざるを得ないのだ。そこにあるのは大学に所属しているという共通項のみである。それではアイデンティティとして誠に弱い。

同様に、古い出版伝統をもつヨーロッパでも事情は日本と同じである。世界最大の大学出版部であるオックスフォードやケンブリッジの出版局をもつていながら、イギ

んで、共通の記事を使って編集している。信濃毎日、京都、神戸、中国など、その他の地方紙は現在、共同通信と時事通信からの配信を受けて、これらに自社のものを加えて編集している。

共同通信では一部の全国紙のような外部の識者による読書委員会という制度を採ってはいない。地方紙の読書欄は、共同、時事、それに地元紙の三つの記事で構成されるから、読書委員会を選ぶという形で、選択に客観性なり権威づけなり、紙面の独自性を強調することが効果を持たないからである。

では、どうして本を選んでいくかといえば、共同通信の場合、社内で毎週一回の会議で決めるのである。毎週、膨大な量の新刊書が出版社から送られてくる。それでも書店に並んでいて送られてこないものもある。それらを手に入れ、さらに「出版ニュース」といった刊行物や広告なども活用する。これらを基に、書評、著者インタビュー、ベストセラー、話題の本、短い紹介などのほか、専門的な研究書や専門的でなくとも注目すべき本は、学芸欄でも記事として紹介することになる。

共同通信の記事は大きく分けると、外信記事はすべての新聞・放送局に配信される。国内の政治、経済、社会などの一般記事は朝日、毎日、読売の三紙を除いたすべての新聞に配信される。文化・学芸、家庭、芸能などの、いわゆるライター側面の記事は先に述べたように地方紙に配信されるわけである。読売が八百万部とか、朝日が七百万部とかいう言い方があるが、その伝で言えば、共同通信で配

信されると、読書欄の場合は全国で計千三百万部ぐらいにはなるだろう。

共同通信のこのような機能は実はあまりよく知られていない。もう十数年も前のことだが、私が学芸欄の現場記者をしていたころ、比較的大手の出版社が急に私に接近してきたことがある。ある作家の小説でインタビュー記事を書いたのだが、その本がいくつかの地方ですごく売れたのだという。それからは新刊書が出て、送ってくるだけではなくて、担当編集者がわざわざ社に持参して売り込んでくるようになった。彼に言わせると、全国紙に掲載されれば首都圏と近畿圏では売り上げが伸びるが、それはどの出版社でもわかっている。だが、実質的な売り上げの差は、実はそれ以外の地方でどれだけ売れるかなのだ。そこで共同通信に目をつけたのは、その編集者の慧眼だった。

さて、大学出版部の刊行物についてだが、最初に述べたように、昨今の新聞の変化からすれば「難しい本」の代表のようにみられるかもしれない。しかし、私はそうは思わない。例にあげて恐縮だが、東大出版会や法政大出版局からは新刊書が比較的よく送られてくるが、一般読者をも意識した編集がなされているように思う。新聞では自然科学、工学といった専門書は扱にくいのが、歴史、教育、民俗・族学、文化人類学、文学、芸術、思想、そして比較的一般読者を意識した社会科学書などは、なんらかの形で扱うことは大いに可能だと思っている。ただ、先ほどから何度も述べているように、それがだんだん難しくなってきたという事情はあるのだが。

読書欄の編集事情

藤野 雅之

(共同通信文化部次長、学芸・読書担当)

いま、新聞の読書欄は大きな変化に直面している。それは出版界の事情の変化にも対応しているようだ。その変化を一口で言えば、やや古い表現になるが「軽薄短小」ということである。

新聞界ではここ数年間、急激に拡大活字への移行が進んでいる。長く続いてきた一行十五字の編集が、一行十三字、あるいは十二字で組むように変わってきている。これは高齢化社会の到来による要求である。新聞の読書欄は、一ページ七段ないし八段で、見開き二ページというのが普通だが、これは変わらないから、このスペースに入る記事の量は当然減ってくる。そこで記事の内容はできるだけ簡潔に、ということが要求される。ところが、収容できる記事の量が減ったのだから、情報の量も当然減ってくるわけで、外部の筆者による書評などで、いきおい内容がわかりにくいものの中には出てくる。このあたりが読書欄の編集の一つの悩みである。

以上は形の上の問題だが、「軽薄短小」ということは内容に関しても大きな変化をもたらしている。「読みやすくわかりよい記事を」という要請である。これだけなら当然のことだが、「読みやすくわかりよい」ということは「難しい本は避ける」ということになりがちだ。事実、私どもが配信している地方紙の読書欄担当者からは、毎月のモニター報告などで「もっと易しい本を取り上げてほしい」とか、極端なものになると「ミーハー的な本を書評で扱ってくれ」などという要求まである。

出版界でも「難しい本」が売れなくなったといわれる。グラフィアやイラストを多用して、口当たりのよい、読んでもすぐ忘れてしまうような本ばかりが売れているようだ。私はそれが必ずしもいけないとは思わないが、そういう本は必ずしも新聞の読書欄で扱う必要はないだろうと思っている。ただ、そういう現象が顕著になっていることは確かだし、こういうわかりよい本しか売れないという状況自体は、ある場合には新聞のニュースや話題にもなって取材の対象になることもある。新聞も商業的な出版物であり、収入のかんりの部分を広告に依存しているという事情が先々の要求の裏にはあるのだろう。これも大きな悩みの一つである。

私ども、共同通信の読書欄は、先にも書いたように地方紙に配信されている。ここで、新聞界の体制を大ざっぱに説明しておく。朝日、毎日、読売、日経、サンケイという全国紙は、それぞれ自社で独自の紙面を編集しているが、中日・東京、北海道新聞、西日本新聞は三社連合を組

た」といった前提が含まれているからだ。

しかし社会面などと違って、読書欄の「一般読者」は見えない。」「難しい本ばかりが出ている」といった声をよく聞く。ごくふつうのサラリーマンである。

「毎週読書欄を見るけれど、一向に読みたいと思う本がない」「難しい本ばかりが出ている」といった声をよく聞く。ごくふつうのサラリーマンである。

各種ベスト・セラー調査によると、いま広い読者を得ている本は、ビジネス書やハウ・ツー書、そしてSFや一部の筆者の推理小説である。では、これらで読書欄を埋めてしまえばいいのか。そうではないだろう。

結局、こうした「よい本」「一般読者」の曖昧さのなかで、私自身は、今のところ「幅広く」といった程度の陳腐な対処の仕方しか思い浮かばない。もともと新聞の読書欄は、学術誌のブック・レビュー欄のような「専門店」ではない。いわば、高級品もあればバーゲンもある「デパート」といったところだったろう。私の「幅広く」という考えは、これをさらに「スーパー」程度までに客が気楽に入れる場にしたというものだった。いうまでもなく、最近の「スーパー」は単なる「安売店」ではなく、「デパート」並みの専門店も入っているし、高級品もある。

「毎日」の読書欄には、長く「研究室」という短評欄があった。その名の通りに、「学術図書」を紹介するところだったが、私が担当したころ、この欄はなくなっていた。当時強かった「読書欄は堅すぎる」「難しい」という声が廃止の理由の一つだったようだ。

これからの「スーパー」には、ちゃんとした「専門店」

も入っていないなければいけないと、私は思っていた。この意見は担当デスクとも一致して、実質的に「研究室」を受け継いだ新しいコーナー「日時計」が生まれた。この欄は、いままも継続している。「学術図書」に積極的に目配りしているという意味で、一般紙の読書欄のなかではユニークなものだろう。

ところで、新聞読書欄として「学術図書」を扱うには、この「専門店」方式しかないのだろうか。何百万という部数である。それこそ「一般読者」を考えれば、それはそれで仕方がないかもしれない。だが、私は、この方式は本当は「次善の策」だと思いたい。

「学術図書とは何か」ということを一言でいうのは難しいだろう。しかし「現実」に即していうと、その一つの側面は、一部の学界だけに向けて、分かりにくい日本語で書かれた少数の本、ということになる。むしろ、本来の「学術図書」は、「学術」という言葉の深みに達しつつもアカデミックな問題関心を持って、明快な言葉で書かれたものだろう。残念ながら、率直に言って、先の「定義」の「学術図書」が多すぎる気がする。

本来の「学術図書」が次々に現れるなら、何も「専門店」は必要ない。その程度には、私たちの「よい本」の概念は広げておきたいと思う。

「学術図書」と新聞の読書欄

奥 武 則

(毎日新聞社学芸部)

雑誌『出版ニュース』の「新聞・雑誌書評リスト」の一九八七年度の集計によると、出版社で一番掲載頻度の高いのは、新潮社である。回数は、二百十七回。講談社、文藝春秋、岩波書店、中央公論社、筑摩書房などが続く。東京大学出版会が五十四回で、十二位に入っている。東大出版会は、前年度三十七回で十五位だった。頻度にして十七回増え、順位では、集英社、日本経済新聞社、早川書房を抜いた。

「ほう、結構多いな」というのが、この東大出版会の数字に対する私の率直な感想だ。少し前まで読書欄を担当していたのだが、私自身、東大出版会の本を、そんなに扱った記憶がないからである。

私の勤務する「毎日」をはじめ「朝日」も「読売」も、読書欄はなぜか、月曜日の朝刊である。昨年から「朝日」だけが書評者の署名を入れることにしたけれど、見開き二

ページの紙面に、八百字程度の書評六本ほどをメインにした構成は各紙同じである。

新聞の読書欄についての基本的了解事項は「新刊の良書の批評・紹介」ということになろう。しかし、この「良書」、つまり「よい本」というのが、曖昧このうえない。

さきほどの三紙の読書欄に共通していることに「委員会」システムがある。外部の十数人を委員に選び、取り上げる本の選択、書評執筆を委嘱している。もちろん、新聞社側が、この「委員会」に全くノー・タッチというわけではないし、実際の運用では学芸部サイドが多かれ少なかれ関与する。

では、なぜ、どこの社も「委員会」を置いているのか。一つには、さきほど「曖昧このうえない」といった「よい本」の選択について「新聞社が恣意的にやっているわけではない、ありませんよ」ということを外部に対して示すためとっていいだろう。

こうして設けられた委員会の席で、例えば、こんな言葉が出る。

「この本はなかなかよい本ですが、学術書ですから」「これは労作です。でも、ちょっと専門的ですから」

いずれも、メインの書評には取り上げないという際の発言である。委員には、大学の先生が多い。ほかには、作家や文芸評論家である。日ごろから「学術図書」になじんでいる人たちとっていい。こういう人たちから、こういう言葉が出るのは、さきほどいった新聞読書欄の基本的了解事項の「よい本」には、実は「新聞の一般読者を対象にし

求められていることは、一般書の比ではないのである。

一般紙が専門書を取りあげる視点は、知的最前線にある問題を、どうやって一般読者の理解しうるレベルにかみくだいて、しかも理論の枠組みを崩さずに伝えうるにかにかかっている。

読売新聞社の読書欄では、二月一日付で今田高俊氏の「モダンの脱構築」(中央公論社、新書)を書評として取りあげた。今田氏は先に「自己組織性」(創文社)という注目すべき書を刊行している。私もこの書が出てすぐ、創文社の編集の方からもらって読んだ。ヴァレラの理論や免疫学、システム論について、多少の知識を持っていたから、たいへん興味をもったが、書評に取りあげるには専門的すぎた。また数年前まで掲載していた専門書の書評コーナー「ブックスタンド」も休んでいるため、関心をもちながら流してしまった。

そうしたとき、「モダンの脱構築」は格好の今田理論の紹介書として貴重であると考えて、一般の人にはやや難解だが、書評に取りあげた。しかし他紙は、取りあげなかった。

今田氏は今日の「産業社会」をゆらぎとして把え、この「ゆらぎ」のうちに、新たな社会の方向を模索している。

一時流行した「分衆・小衆論」やポスト工業社会論、情報社会論といった近未来学を連想するのだが、この本では「産業社会のゆらぎ」を、近年輩出してきたポスト・モダンと何のためらいもなく結びつけてしまう点にある。そのため、ヴァレラやニールス・イェルの免疫学、免疫ネッ

トワーク論、流体力学や熱力学の散逸構造論といった近年の「ゆらぎ」の科学が参照されているのである。ここに共通していることは、システムが自らの構造を変化させ、自己を再編成するという「自己組織体」の考え方である。時としてモダンや産業社会の把え方は、図式的ともいえるが、それだけ明快な議論が展開されている。

このように、現代の社会科学の専門書は、きわめて他分野との相互のり入れによる理論化が行きとどいていくから、古い枠組みで一つの学問を考えることはできない。「ニューサイエンス」「ポスト・モダン」の理論は、社会科学、自然科学、精神科学が渾然一体となっている場合すらあるのである。

私たちはややもすると口当りのよい一般書を手に取り易く、書評も一般の人を主な対象とする以上、それを取りあげるのであるが、知的最先端に入り込んでいけば行くほど、一般の人も専門書を読みふける傾向が出てきている。以上述べたことは、あくまでも私見にすぎないが、最後に大学出版部に望むことは、豊かな大学の人脈を活用し、学術図書をつくるだけでなく、一般の人と専門分野の橋渡しをする中間的な書物の刊行を、大いに期待したいと思う。

ジャーナリズムからみた 学術図書出版

増永 俊一

(読売新聞社文化部長)

先般、見田宗介、栗原彬、田中義久氏編による「社会学事典」(弘文堂)が刊行され、話題を集めている。一九五八年、福武直、日高六郎、高橋徹氏編の「社会学辞典」が出てから三十年、隔世の感がする。当時の社会学は戦後、価値観が急変し、混乱した社会を把握し直す学問として脚光をあびていた。しかし、六〇年、七〇年、八〇年代と時代が推移するとともに、その影響力は失われたといってしまう。

ところが昨年秋のブラック・マンデーに象徴されるような激動、ゆらぎの時代を迎えて、社会学が再び注目されてきた。今田高俊、北見俊哉、佐藤健二氏ら若手の社会学の旗手たちが、つぎつぎに新しい学問の枠組みをひっさげて登場してきている。学問そのものに流行現象があることを如実に示しているといえるだろう。

栗原彬氏は「社会学事典」を評して、「世紀末から新しい

世紀へ向けての社会学のスタンダードをめざしている」ことをあげる一方で「狭い意味の社会学ではなく、豊かな広がりのあるものとして考え、日常的に、社会的に重要な項目を社会学の視点から扱えた」といっている。従って、「愛」「笑い」「時間」「空間」といった日常的なことばかり、「アジール」「狂気」「生命倫理」「シャドウ・ワーク」「宇宙樹」のようなキーワードが今目的に問題提起されている。

「愛」について、栗原氏は書いている。

「愛とは、主体が対象と融合すること、一体化することであり、またそこに成り立つ関係でもある。愛の対象は一つの宇宙である……」と。さらに「愛の原型」「エロスとアガペ」「慈悲と仁」「愛の社会関係、愛の社会制度」まで、簡潔ではあるが、枝葉を延ばした解説をつけている。

このことは「愛」というプライベートな関係が、決して個人対個人のことにと止まらず、大きな社会的広がりを持っていることを示している。それならば、社会学という学問そのものが、現代社会では多義的で、重層的な関係を生むことがわかってくる。政治学、経済学、精神分析、哲学、言語学、従来は見すごされてきたイスラーム社会や第三世界との相互のり入れを見すえたいうえでの考察が必要になってきているということである。

長々と「社会学事典」を例にあげてきたが、学術図書つまり専門書も、ジャーナリストィックに見ると、多くの顔をもって見られるということであり、社会の変化に耐えうる、長いスケールをもって、豊かな展望にたった専門書が

●あしがき

●今回は、マスコミ（新聞読者）を対象とするジャーナリストの方たちにご執筆いただいた。題して「ジャーナリズムからみた学術図書出版」。読売新聞文化部の増永俊一氏、毎日新聞学芸部の奥武則氏、共同通信文化部の藤野雅之氏に、公の立場よりもむしろ個人的な思い入れの立場から語っていただいた。少数数の出版物が多数を占める大学出版部にとって警鐘に価する示唆が多く、また現代日本の出版文化の行く末にも抵触するさまざまな問題提起をも試みていただいた。私ども協会関係者はもちろんのこと、大学、短大等、そして大学図書館の当事者にとって裨益することも少なくない。朝日新聞、日経新聞には残念ながら諸般の事情が重なりご登場いただけなかった。

●今年、大学出版部協会創立二十五周年にあたる。協会が創立されたのは、一九六三（昭和三八）年の六月であった。以来四半世紀経つた。表紙二ページに「大学出版部協会の歩み」が掲載されているが、協会活動が本格化したのは、一九七二年の国際図書年を記念して開催されたアジア太平洋地域大学出版部会議が契機であった。協会加盟大学はもろニアメリカ、カナダ、インドネシア、パキスタン、韓国、ヨーロッパから多数参加者もあった。また、翌年京都で開催されたI P A（国際出版連合）大会と併行して

I A S P（国際学術連合）総会も、協会の「大学出版部運動」に拍車をかけた。営業部会が独自の活動を展開しはじめたのもまもなくであった。創立二十周年時ころより編集部会も始動した。現在では、月例の幹事会を中心に、営業部会、編集部会そして広報、国際、刊行助成の委員会も活発になりつつある。

●この5号では、協会創立時のメンバーであるOB諸氏に寄稿いただいた。初代幹事長の箕輪成男氏、協会ルネサンスの立役者、中平千三郎氏そして三井数美氏、田口迪太郎氏。四人四様の語り口のなかに協会の歩みに寄せられる氏らの愛情を読みとれることであろうし、協会自体のレゾン・デトルも確認できることになる。

●大学出版部協会創立二十五周年記念事業は、昨年来、協会内部で検討されてきたが、次の事業計画が確定し、各実行委員会が発足した。

- (1) 記念祝賀会
東京・市ヶ谷の私学会館、六月三十日（木）
- (2) 二十五年の歩み編集
A5判、一二頁、記録性ととも写真も多くビジュアルな紙面を創るという編集方針。
- (3) 記念講演会
日本生命財団の支援により、札幌、東京、名古屋、大阪、福岡の五都市、大学出版部協会メンバーの主要エリアをカバーする。
- (4) 記念ブックフェア
五年前の全国縦断ブックフェアに匹敵する規模のブックフェアを、ほぼ年間を通して行なう。

（編集部会担当幹事 関野利之）

●16大学出版部代表者及び協会・部会等担当者一覧

1988年3月31日現在

	代表者	協会担当	営業部会	編集部会	刊行助成担当
北海道大学図書刊行会	安井 勉	前田 次郎	管波 秀樹	田宮 治男	田宮 治男
慶應通信	道祖土廣一	山國 顕	高橋 忠身	藤村 信行	佐藤 武次
産業能率大学出版部	上野 一郎	小野沢公男	山本 一雄	粕谷 正利	小野沢公男
玉川大学出版部	小原 哲郎	関野 利之	鈴木 孝雄	成田 隆昌	宮原 正弘
中央大学出版部	澤島 政夫	棟尾 裕	古賀 忠夫	矢崎 英明	田中 浩博
中海大学出版部	松前 達郎	山田 涉	松岡 茂和	木下 正之	三浦 義博
東京大学出版部	菅野 卓雄	山下 正	惣塚 一雄	藤 修	渡辺 勲
東京電機大学出版局	廣川 利男	高野 昭吉	高埜 則和	岩下 行徳	朝武 清実
東京農業大学出版部	西郷 光彦	菊地 徳治	行元 鐵夫	小平 巖	藤村 洋
東京理科大学出版部	村上 孝夫	後藤 善治	鎌田 靖彦	秋田 公士	平川 俊彦
法政大学出版部	青木 宗也	阿部 好文	三浦 邦宏	丸山とも子	丸山とも子
明星大学出版部	児玉 九十	三浦 邦宏	唐沢 幹雄	寺山 浩司	鈴木 吉郎
早稲田大学出版部	奥島 孝康	城下 幸雄	伊藤 八郎	稲垣美智子	伊藤 八郎
名古屋大学出版部	藤瀬 浩司	後藤 郁夫	井内 雄二	井内 雄二	井内 雄二
関西大学出版部	久井 忠雄	井内 雄二	鳥井 四朗	永山 俊二	藤木 雅幸
九州大学出版部	緒方 道彦	藤木 雅幸			

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北8条西8丁目 クラーク会館 TEL.011-747-2308 FAX.011-758-4071
慶應通信	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL.03-451-3584 FAX.03-451-3122
産業能率大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル4F TEL.03-724-9101 FAX.03-717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL.0427-28-3213 FAX.0427-28-3218
中央大学出版部	〒190-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL.0426-74-2351 FAX.0426-74-2354
東海大学出版会	〒160 東京都新宿区新宿3-27-4 新宿東海ビル TEL.03-356-1541 FAX.03-341-1833
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL.03-811-8814 FAX.03-812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL.03-294-1551 FAX.03-294-2807
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL.03-420-2131 FAX.03-706-8851 (総務課)
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区神楽坂1-3 TEL.03-260-4271 FAX.03-260-4294
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見町2-17-1 TEL.03-237-1731 FAX.03-237-8899
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL.0425-91-5115 FAX.0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒160 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL.03-203-1551 FAX.03-207-0406
名古屋大学出版会	〒464 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL.052-781-5027 FAX.052-781-0697
関西大学出版部	〒564 吹田市山手町3-3-35 関西大学会館 TEL.06-388-1121 FAX.06-330-3718
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL.092-641-0515 FAX.092-641-0172

大学出版(第5号)'88春 昭和63年5月1日発行 発行者 大学出版部協会幹事長 石井和夫

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-812-2111(内)7954

頒布価格100円(千共)